

二〇一九（令和元）年

親鸞聖人

報恩講

法要



本願寺小樽別院

小樽市若松一丁目四番一七号



おん どん さん
恩 徳 讃

によらいだいひ おんどん
如来大悲の恩徳は

み こ ほう
身を粉にしても報ずべし

ししゅちしき おんどん
師主知識の恩徳も

しや
ほねをくだきても謝すべし

目 次

恩徳讃・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
報恩講について・・・・・・・・・・	2
ご挨拶〈本願寺小樽別院輪番 芝原 文雄〉・・	3
浄土真宗の教章（私の歩む道）・・・・・	4
伝灯奉告法要のご親教 念仏者の生き方・・・・・	5
「私たちのちかい」について・・・・・・・・・・	7
報恩講法要全日程表・・・・・・・・・・	8
法要日程（十三日）・・・・・・・・・・	9
法要日程（十四日）・・・・・・・・・・	10
法要日程（十五日）・・・・・・・・・・	12
法要日程（十六日）・・・・・・・・・・	13
親鸞聖人のご生涯（御絵伝解説）・・・・・	14
親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年	

報恩講は親鸞聖人のご遺徳を偲び、そのご苦勞を通じて、阿弥陀如来のご本願によるお救いをあらためて心に深く味わわせていただく法要です。

親鸞聖人の三十三回忌のご法要にあたり、本願寺第三代覚如上人がそのご遺徳を讃仰するため『報恩講私記（ほうおんこうしき）』をご製作になられ、以来、聖人のご命日の法要は報恩講として、大切にお勤めされてきました。

本願寺第八代蓮如上人がお示しのとおり、正しくお念仏のいわれを聞かせていただき、身にいただいて、真実信心の行者になることが聖人の御恩に報いる道です。

小樽別院では、毎年十月十三日から十六日までお勤めいたしております。お念仏の道をお示しいただいた親鸞聖人のご遺徳を偲ばせていただき、お念仏に遇えた喜びをこの身に受け、共々にお念仏申しましょう。

二〇一九（令和元）年

親鸞聖人報恩講法要

親鸞聖人報恩講法要をお迎えして

本願寺小樽別院輪番

芝原 文雄
しば はら ぶん ゆう

皆様には「小樽別院親鸞聖人報恩講法要」によるこそお参りくださいました。平素より、別院のご法義繁盛と護持発展のためご協力いただき、また、このたびのご法要修行にあたりご懇念を賜り厚くお礼を申しあげます。

報恩講法要は親鸞聖人の教えに導かれ、お念仏申させていただく私たちにとって最も大切なご法要です。

親鸞聖人が生きられた時代は、戦乱や天災地変が相次ぎ、多くの人々が世の無常を痛感し、生きる意味を問い、救いの道を真剣に求めた時代でした。そのような時代の中で聖人は阿弥陀様の「すべての人を必ず救う」という願いによって「生死出づべき道」をめぐまれ、真実信心ひとつで救われる浄土真宗のみ教えを明らかにされ、報恩感謝のお念仏申す人生を歩まれました。

さて、現代の世界各国の情勢は自国の経済や文化を優先する排他的で閉鎖的な在り方が優勢となり、それにより国際的に様々な対立や紛争が起こっています。その解決のために世界の宗教はその役割を十分に果たしているとはいえません。今こそ「自他共に心豊かに生きることでできる社会の実現」を理念とし、仏道の基本を踏まえて人々と共に歩む念仏者の果たすべき使命があるのではないのでしょうか。

このたび、その使命の目的を実践するために、私たちに「念仏者の生き方」の心をより広くお伝えするため、その肝要を簡潔な四力条の言葉にまとめて「私たちのちかい」をお示しくできました。浄土真宗の門徒として大切な心掛けが平易な表現で示されています。繰り返し唱和させていただきます。

また、親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要を二〇二三（令和五）年に迎えるにあたり、このほど慶讃法要の趣意書が策定されました。聖人の説き示してくださったみ教えに出遇うことができた喜びを込めて、「御誕生」を祝い、「立教開宗」に感謝する法要がお勤めできますよう、精一杯努めてまいりましょう。今年もまた小樽別院・各説教所の報恩講期間中に正しくお念仏のおいわれを聞かせていただき、親鸞聖人のみ教えとご遺徳が一人でも多くの方にわかりやすく伝わる機縁となるよう、手作りの冊子を作成いたしました。ご活用ください。どうぞお時間の許す限り、別院にて心安らぐひと時をお過ごしください。

浄土真宗の教章(私の歩む道)

宗名

浄土真宗

宗祖
(開山)

親鸞聖人

誕生 一一七三年五月二十一日

(承安三年四月一日)

往生 一二六三年一月十六日

(弘長二年十一月二十八日)

宗派

浄土真宗本願寺派

本山

龍谷山本願寺(西本願寺)

本尊

阿弥陀如来(南無阿弥陀仏)

聖典

・釈迦如来が説かれた「浄土三部経」

『仏説無量寿経』 『仏説観無量寿経』

『仏説阿弥陀経』

・宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』(教行信証行巻末の偈文)

『浄土和讃』 『高僧和讃』 『正像末和讃』

・中興の祖 蓮如上人のお手紙

『御文章』

教義

生活

宗門

阿弥陀如来の本願力によつて信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還つて人々を教化する。

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによつて、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

伝灯奉告法要ご親教 念仏者の生き方

仏教は今から約二五〇〇年前、釈尊（しゃくそん）がさとりを開いて仏陀（ぶつだ）となられたことに始まります。わが国では、仏教はもともと仏法（ぶつぽう）と呼ばれていました。ここでいう法とは、この世界と私たち人間のありのままの真実ということであり、これは時間と場所を超えた普遍的な真実です。そして、この真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩を超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常（しよぎょうむじょう）」と「縁起（えんぎ）」という言葉で表します。「諸行無常」とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまることなく移り変わっているということであり、「縁起」とは、その一瞬ごとにすべての物事は、原因や条件が互いに関わりあって存在しているという真実です。したがって、そのような世界のあり方の中には、固定した変化しない私というものはありません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自分というものを固定した実体と考え、欲望の赴くままに自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心の心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りにならないことで悩み苦しんだり、争いを起こしたりして、苦悩の人生から一步たりとも自由になれないのです。このように真実に背（そむ）いた自己中心性を仏教では無明煩惱（むみょうぼんのう）といい、この煩惱が私たちを迷いの世界に繋（つな）ぎ止める原因となるのです。なかでも代表的な煩惱は、むさぼり・いかり・おろかさの三つで、これを三毒（さんどく）の煩惱といいます。

親鸞聖人（しんらんしょうにん）も煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山（ひえいざん）で二十年にわたりご修行に励まれました。しかし、それほど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の深さを自覚され、ついに比叡山を下り、法然（ほうねん）聖人のお導きによって阿弥陀如来（あみだによらい）の救いのはたらきに出遇（あ）われました。阿弥陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま救い、さとりの世界へ導こうと願われ、その願い通りにはたらき続けてくださっている仏さまです。この願いを、本願（ほんがん）といいます。我執（がしゅう）、我欲（がよく）の世界に迷い込み、そこから抜け出せない私を、そのままの姿で救うとはたらき続けていくのださる阿弥陀如来のご本願ほど、有り難いお慈悲（じひ）はありません。しかし、今ここでの救いの中にありながらも、そのお慈悲ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かさ、煩惱の深さに悲嘆（ひたん）せざるをえません。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎（つつし）み、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足（しょうよくちそく）」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語（わげんあいご）」という生き方です。たとえば、それらが仏さまの真似事（まねごと）といわれようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙で、「（あなた方は）今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」とお示しになられています。たいへん重いご教示です。今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲に執（とら）われた煩惱具足（ぼんのうぐそく）の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはいできません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指し、精一杯（せいいつぱい）努力させていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧（ちえ）と慈悲（じひ）を正しく、わかりやすく伝え、そのお心になうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう。

二〇一六（平成二十八）年十月一日

浄土真宗本願寺派門主

おお 谷 光 淳
たに こう じゅん

※このご親教は、伝灯奉告法要初日にお示しくございました。

「私たちのちかい」についての親教

私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちがこの現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきました。このたび「念仏者の生き方」を皆様により親しみ、理解していただきたいという思いから、その肝要を「私たちのちかい」として次の四カ条にまとめました。

私たちのちかい

- 一、自分の殻(から)に閉じこもることなく
穏(おだ)やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑(ほほえ)み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲(じひ)に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき
日々に精一杯(せいいつぱい)つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

この「私たちのちかい」は、特に若い人の宗教離れが盛んに言われております今日、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会で唱和していただきたいと思っております。そして、先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

二〇一八（平成三十）年十一月二十三日

浄土真宗本願寺派門主

おお 谷 光 淳
たに こう じゅん

※この親教は、二〇一八年「秋の法要」にてお示しくございました。

報 恩 講 法 要 全 日 程 表

	時 間	法要・行事等	法 話
13 日 (日)	13 時 30 分	①第 1 逮夜『宗祖讃仰作法(音楽法要)』 『御伝鈔上卷』拝読	法話 1 席(約 40 分)
14 日 (月)	6 時 30 分	②第 1 晨朝『正信偈行譜』	法話 1 席(約 30 分)
	10 時 00 分	③第 1 日中『正信念仏偈作法』	法話 1 席(約 40 分)
	13 時 30 分	④第 2 逮夜『大師影供作法』 引き続き、『御伝鈔下卷』拝読	法話 1 席(約 40 分)
	18 時 00 分	⑤第 1 初夜『往生礼讃偈(日没)』	祖徳讃仰(約 30 分) 法話 1 席(約 30 分)
15 日 (火)	6 時 30 分	⑥第 2 晨朝『正信偈行譜』	法話 1 席(約 30 分)
	10 時 00 分	⑦第 2 日中『奉讃大師作法』 引き続き、小樽別院物故者追悼法要 『読経作法』	法話 1 席(約 40 分)
	12 時 00 分	お斎 会館 2 階 (ホール)	
	13 時 30 分	⑧大逮夜『五會念仏作法』 引き続き、『御俗姓』拝読	法話 1 席(約 40 分)
	18 時 00 分	⑨第 2 初夜『往生礼讃偈(初夜)』 法話終了後、後夜『讃仏偈』	祖徳讃仰(約 30 分) 法話 1 席(約 30 分)
16 日 (水)	6 時 30 分	⑩第 3 晨朝『正信偈行譜』	法話 1 席(約 30 分)
	9 時 00 分	* ご長寿を祝う記念法要『重誓偈』	
	10 時 00 分	⑪満日中『宗祖讃仰作法』 引き続き、御礼言上	法話 1 席(約 40 分)

報恩講法要（日程）

13 日
（日）

十三時三〇分

第一逮夜法要『宗祖讃仰作法（音楽法要）』しゅうそさんこうさほう 楽入

引き続き

『御伝鈔上巻』拝読（約四〇分）

引き続き

布教（約四〇分）

本願寺派布教使 阿部 信 幾 師

（東京教区・群馬組・西福寺）

『御伝鈔（ごでんしょう）』と『御絵伝（ごえでん）』

本願寺第三代覚如上人は、親鸞聖人のご遺徳を讃仰するために、そのご生涯の行蹟を文章と絵で交互に描いた

絵巻物をつくられました。『善信聖人親鸞伝絵（ぜんしんしょうようにんしんらんでんね）』あるいは『本願寺聖人親鸞

伝絵（ほんがんにしょうようにんしんらんでんね）』などと呼ばれています。

後に多くのご門徒の方がたにご覧いただけるようにと、文章と絵は別々に分けられ、それぞれ『御伝鈔』と呼ばれ、流布するようになりました。

報恩講の折にこの「御絵伝」（四幅）を本堂の右余間にお掛けし、十月十三日に『御伝鈔上巻』を、十四日に『御伝鈔下巻』を拝読して宗祖のご生涯を偲ばせていただきます。



報恩講法要（日程）

14 日
(月)

六時 三〇分

第一晨朝『正信念仏偈（行譜）』

正像末和讃一七一帖「五十六億」

引き続き

御文章『聖人一流章』拝読

引き続き

布教（約三〇分）

十時 〇〇分

第一日中法要『正信念仏偈作法』樂入

引き続き

布教（約四〇分）

十三時 三〇分

第二逮夜『大師影供作法』樂入

引き続き

『御伝鈔下巻』拝読（約四〇分）

引き続き

布教（約四〇分）

十八時 〇〇分

第一初夜『往生礼讃偈（日没）』

引き続き

祖徳讃仰（約三〇分）

後志組 照覚寺 佐々木法雨 師

引き続き

布教（約三〇分）

祖徳讃仰（そとくさんぎょう）

祖徳讃仰とは、報恩講にご出勤の

そうきようじん

崇敬寺院の方によるご法話です。

親鸞聖人がそのご生涯をかけてお

伝えくださった阿弥陀如来の救いを

ご遺徳と味わい、その言葉や教えを通

して今私たちがどのように聴聞させ

ていただいているかをお参りの方に

お伝えしていただく法座です。

十月十四日・十五月初夜（十八時）

の後、引き続きでございます。



報恩講法要（日程）

15 日
(火)

六時 三〇分

第二晨朝『正信念仏偈（行譜）』

浄土和讃五十五帖「尊者阿難」

引き続き

御文章『信心獲得章』拝読

引き続き

布教（約三〇分）

十時 〇〇分

第二日中法要『奉讃大師作法』樂入

引き続き

物故者追悼法要『読経作法（阿弥陀経）』

引き続き

布教（約四〇分）

十三時 三〇分

大逮夜『五會念仏作法』樂入
ごえねんぶつさほう

引き続き

『御俗姓』拝読（約一〇分）

引き続き

布教（約四〇分）

十八時 〇〇分

第一初夜『往生礼讃偈（初夜）』

引き続き

祖徳讃仰（約三〇分）

留萌組 信楽寺 吉川昭恵 師

引き続き

布教（約三〇分）

御俗姓（ごぞくしやう）

ちゆうぐう 中興の祖蓮如上人が、六十三歳の

一四七七（文明九）年十一月初めに、親

鸞聖人の御正忌報恩講に際してしたた

められた御文章。第十八代文如上人が

一七九〇（寛政二）年に『夏御文章』と

合わせて、拝読用として開版（木版で印

刷し出版すること）された。本山では、

御俗姓御文章と呼び、一般には御俗姓、

他派では『俗姓の御文』とも呼ばれて

いる。

前文では宗祖の俗姓を明かし、行蹟を

述べられ、後文では報恩講における門徒

の心得が説かれ、一念帰命の眞実信心を

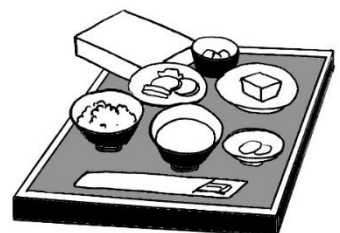
進められています。

引き続き 第一後夜『讃仏偈（さんぶつげ）』

※後夜の後、本堂にてパンを土産にお持ち帰りいただいております。

お 齋^{とき} 十二時〇〇分頃（日中法要の後）

ところ 会館二階（ホール） 全席椅子席



仏教では、『食事（じきじ）』と呼ばれる、午前十時から

正午までの間に食事をする習わしがあり、このときの料理

を『齋（とき）』といいます。毎年十月十五日の日中法要

終了後にお齋の接待を会館二階（ホール）にておこなっ

ています。小樽別院では、動物性の食材は一切用いない

精進料理をご用意しておりますので、是非ご賞味ください。

報恩講法要（日程）

16 日
(水)

六時 三〇分

第三晨朝『正信念仏偈（行譜）』

浄土和讃三十帖「弥陀成仏」

引き続き

御文章『御正忌章』拝読

引き続き

布教（約三〇分）

九時 〇〇分

ご長寿を祝う記念法要『重誓偈』

十時 〇〇分

満日中法要『宗祖讃仰作法』楽入

引き続き

おれいごんじょう
御礼言上

引き続き

布教（約四〇分）



親鸞聖人のご生涯（御絵伝解説）

親鸞聖人のご生涯をまとめた絵物語を『御絵伝』といいます。

聖人のひ孫にあたる本願寺第三代覚如上人が、聖人の三十三回

忌の翌年にそのご生涯を讃仰するために書かれた、『本願寺聖人親

鸞伝絵』（絵巻物）を元にしています。

後にこの『親鸞伝絵』が「文章の部分『御伝鈔』」と「絵の部分

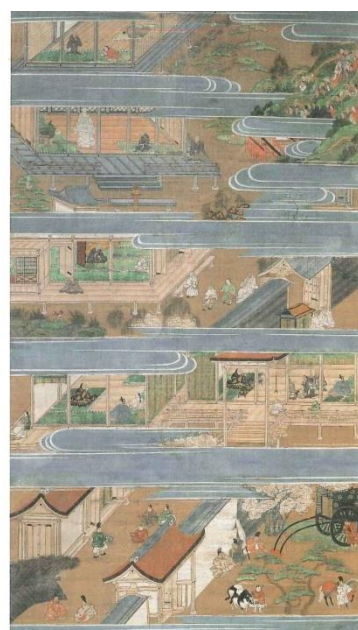
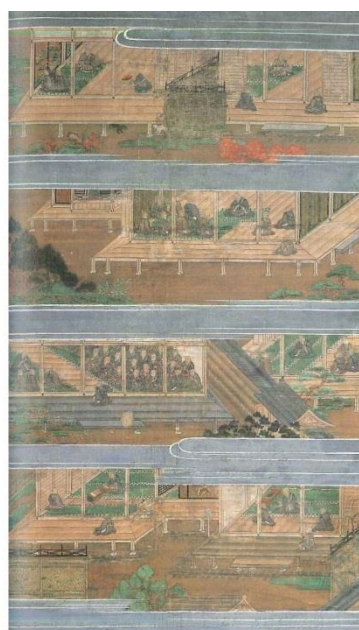
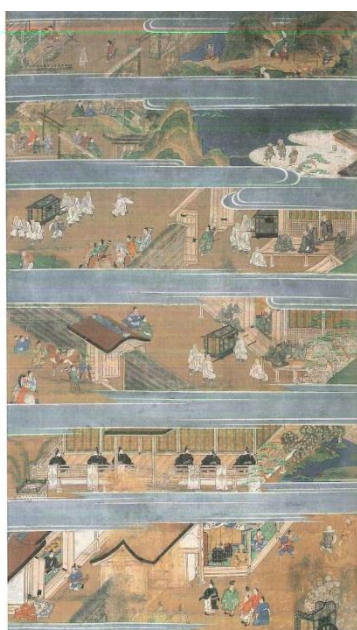
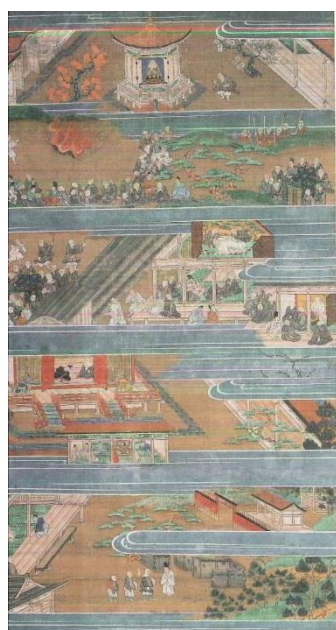
『御絵伝』」に分けられ、江戸時代になってからは、一般のお寺で

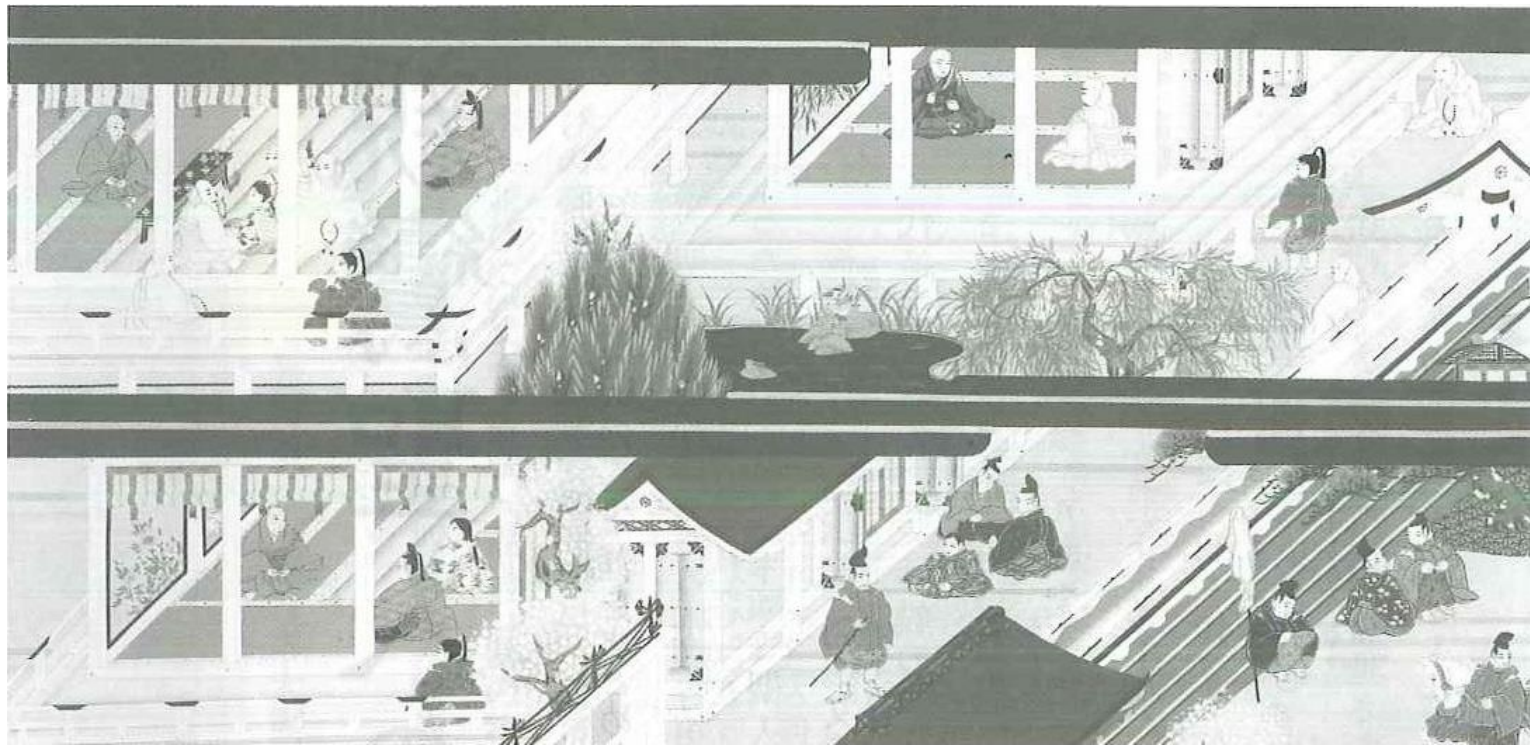
も、報恩講（聖人のご命日法要）の際には、『御絵伝』が奉懸され、

『御伝鈔』が拝読され、広くご門徒に親しまれるようになりました。

『御絵伝』は、八幅や六幅で描かれているものもありますが、主

にお寺で奉懸されるのは、四幅や二幅で描かれているものです。





【出家学道（しゅつけがくどう）】（下段・上段左）

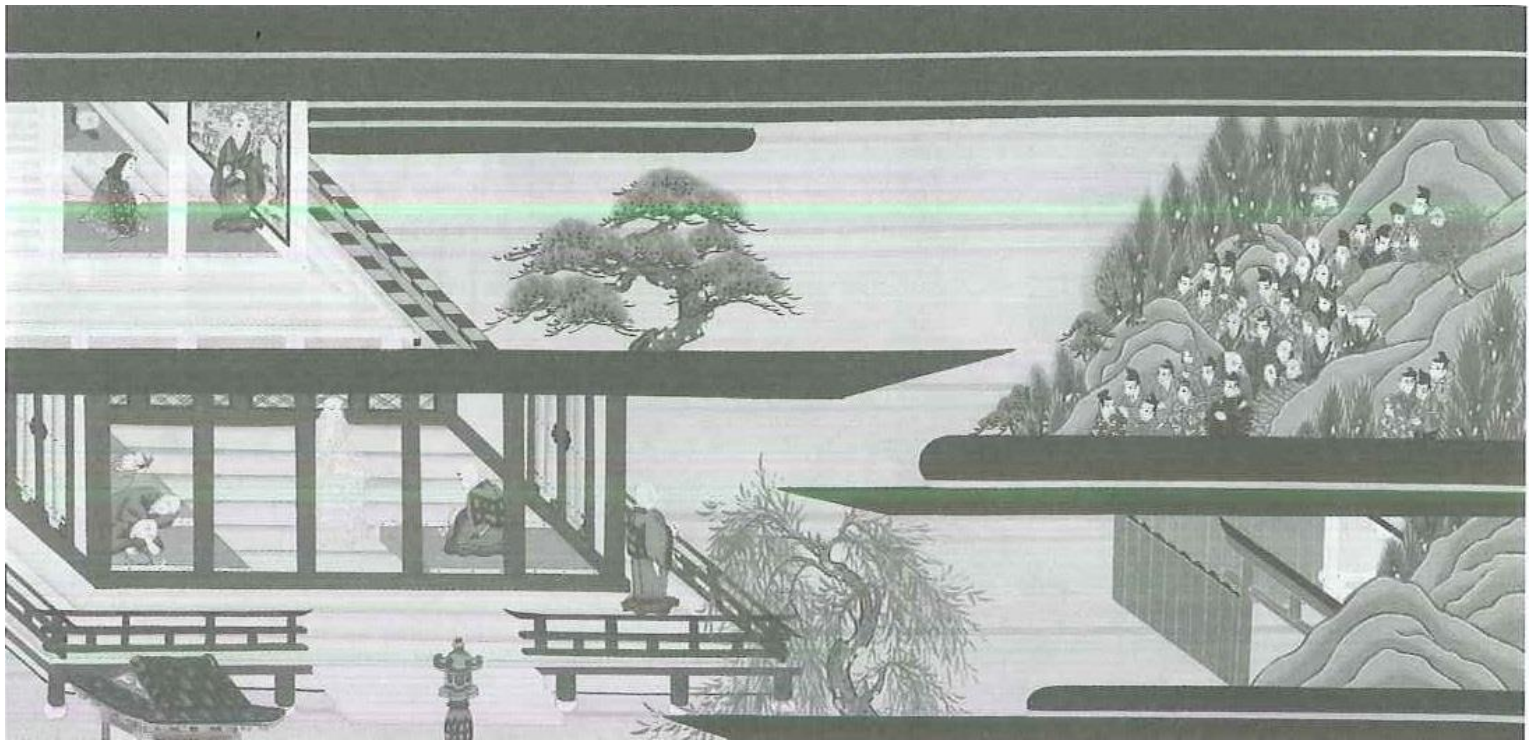
15

一一七三（承安三年、今の京都市伏見区日野にお生まれになった親鸞聖人は、
じょうあん 一二八一（治承五年）年、御年九歳で、伯父の日野範綱郷に伴われ京都市東山区の
じしょう 慈田和尚（慈鎮和尚）の坊舎（白川房）で、僧侶となる儀式（お得度）を受け出
じえんかしよう 家されました。
おじ 夜も近いから、明日来るようにと一旦断りましたが、聖人は「明日ありと思
あださくら う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものは」と歌を詠まれ、その日の出家を許されま
はんねん す。この後聖人は、範宴と名乗られました。

各場面には、咲き誇るその桜、上段左には、白川房の慈田和尚が見守る中、紙燭
ていはつ で手元を照らしながら、剃髪する（髪を剃る）様子が描かれています。

【吉水入室（きつすいにゆうしつ）】（上段右）

一二〇一（建仁元年、二十九歳とられた聖人は、頂法寺（六角堂）の参籠を
けんにん 経て、源空聖人（法然聖人）のもとを訪ねます。聖人が白い衣と袈裟を着けて、源
げんくう 空聖人のもとを訪れている様子が描かれています。



【六角夢想（ろっかくむそう）】（下段・上段右）

親鸞聖人は、二十九歳の時比叡山を下りられ、京都市中京区の頂法寺（六角堂）ちょうほうじに百日間の参籠さんろうをされます。

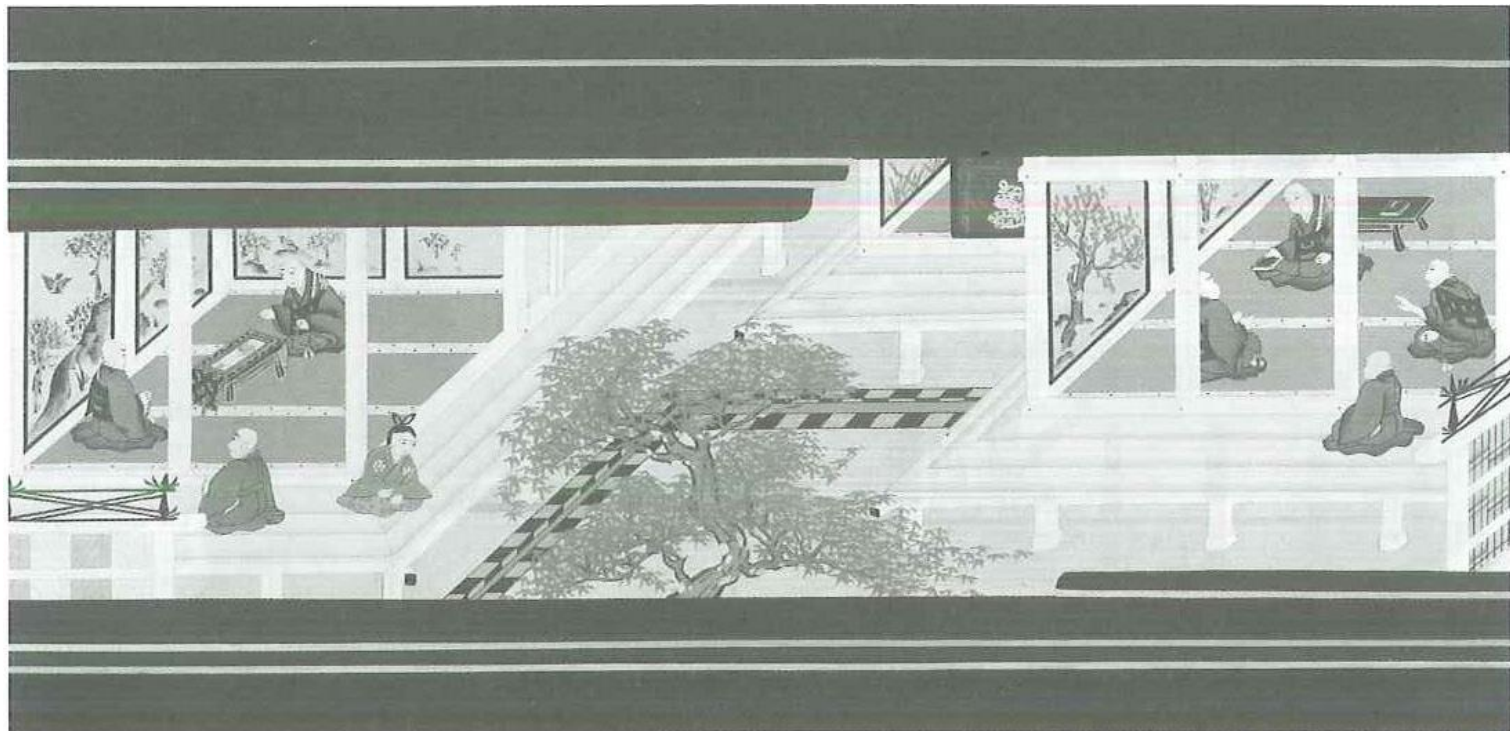
この絵は、その九十五日目の明け方に聖人が見られた夢の様子が描かれています。この夢を見られた聖人は、源空聖人（法然聖人）のもとを訪ねるご決意をされ、お弟子になられます。

聖人は、お堂の左端で横になっているお姿と、頂法寺のご本尊、救世観音くせかんのんに礼拝らいはいされているお姿、東（右）を見られているお姿で描かれています。

【蓮位夢想（れんいむそう）】（上段左）

この場面は、親鸞聖人八十四歳の頃に話をうつし、一二五六（建長八）けんちよう年、蓮位れんいという聖人のお弟子が見た様子が描かれています。蓮位は上段左上、眠っている姿で描かれています。

その夢は、聖徳太子が聖人に向かって礼拝らいはいされていたという内容でした。このことによって、聖人が阿弥陀如来の化身であることが伝えられています。



【選択付属（せんじやくふぞく）】

親鸞聖人が、源空聖人（法然聖人）から許されて、『選択本願念仏集』と源空聖

えぞう

人の絵像を授かっている場面です。

聖人はその主著『顕浄土真実教行証文類』の後序で、

けんじょうどしんじつきようぎようしyouもんるい

ごじよ

げんきゆうきのとのうし

元久 乙丑の歳（二二〇五〔元久二年、

おんじよ

かぶ

恩恕（お許し）を蒙りて（受けて）『選択』（選択集）を書しき。

だいしにち

同じき年の初夏中旬第四日（陰暦四月十四日）に、

「選択本願念仏集」の内題の字（書物の題名）、

ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と

しゃくしやつくう

「釈綽空」の字と、空（源空聖人〓法然聖人）の真筆（直筆）をもつて、

しんぴつ

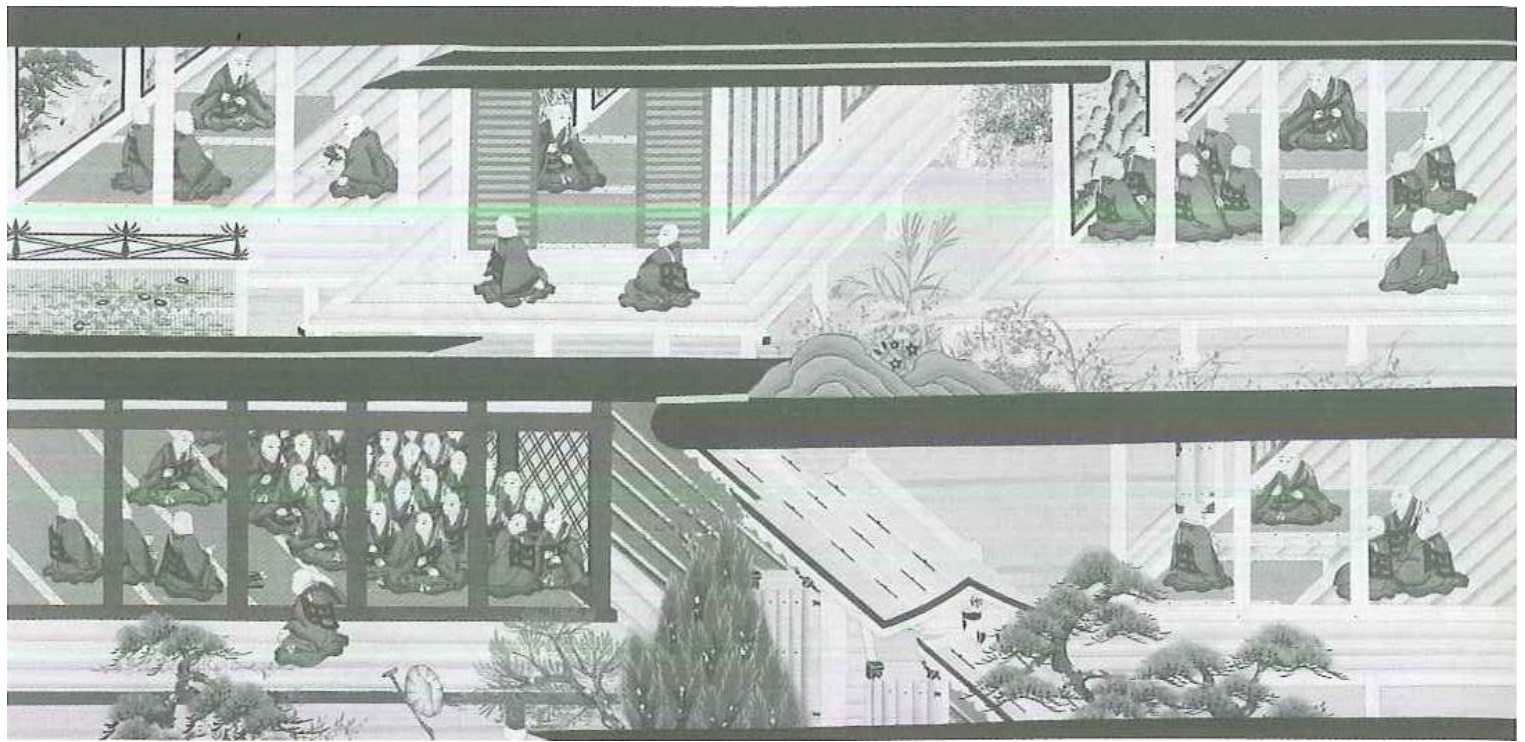
これを書かしたまひき（書いてくださった）。

同じき日、空（源空聖人）の真影（絵像）申し預かりて、図画したてまつる。

しんねい

ずが

と思ひ起こされています。



【信行両座（しんぎょうりょうざ）】（下段）

ある時親鸞聖人が「お浄土へ行くことは、ご信心で決まるか、念仏の行をはげむことで決まるか」お弟子たちに確認したいと、源空聖人（法然聖人）に相談しました（下段右）。「ご信心でお浄土へ行くことが決まる」という場所には、はたして数人のお弟子と聖人、駆け付けた法力房（熊谷直実）ほうりきぼう くまがいのなおなおね、後に源空聖人が座りました（下段左）。

【信心諍論（しんじんじょうろん）】（上段右）

ある時親鸞聖人が「源空聖人のご信心と、わたしのご信心は同じです」と話し、お弟子たちに厳しく咎められました。源空聖人は、「ご信心は、阿弥陀如来から賜るもの。同じだから同じお浄土へ行けます」と仰った様子おつしやが描かれています。

【入西鑑察（にゅうさいかんざつ）】（上段左）

時代は変わって、親鸞聖人七十歳の頃お弟子の入西が、聖人に絵姿えすがたをお願いするより先に、聖人がその気持ちきもちを察して、「定禅じようぜんという絵師に描いてもらおうといい」と言われました（右）。定禅は、「夢の中で描いた生身の阿弥陀如来である僧侶こそ、親鸞聖人でした」と感動の涙を流しながらお姿を描かれました（左）。



【念仏禁止（ねんぶつきんし）】（下段右）

お念仏の教えが弘ひろまるにつれ、それまでの仏教諸宗しよしゆうとの摩擦すりふが起こるようになります。笏しやくを持った公卿くぎようが、門の前に奏上に訪れている様子が描かれています。

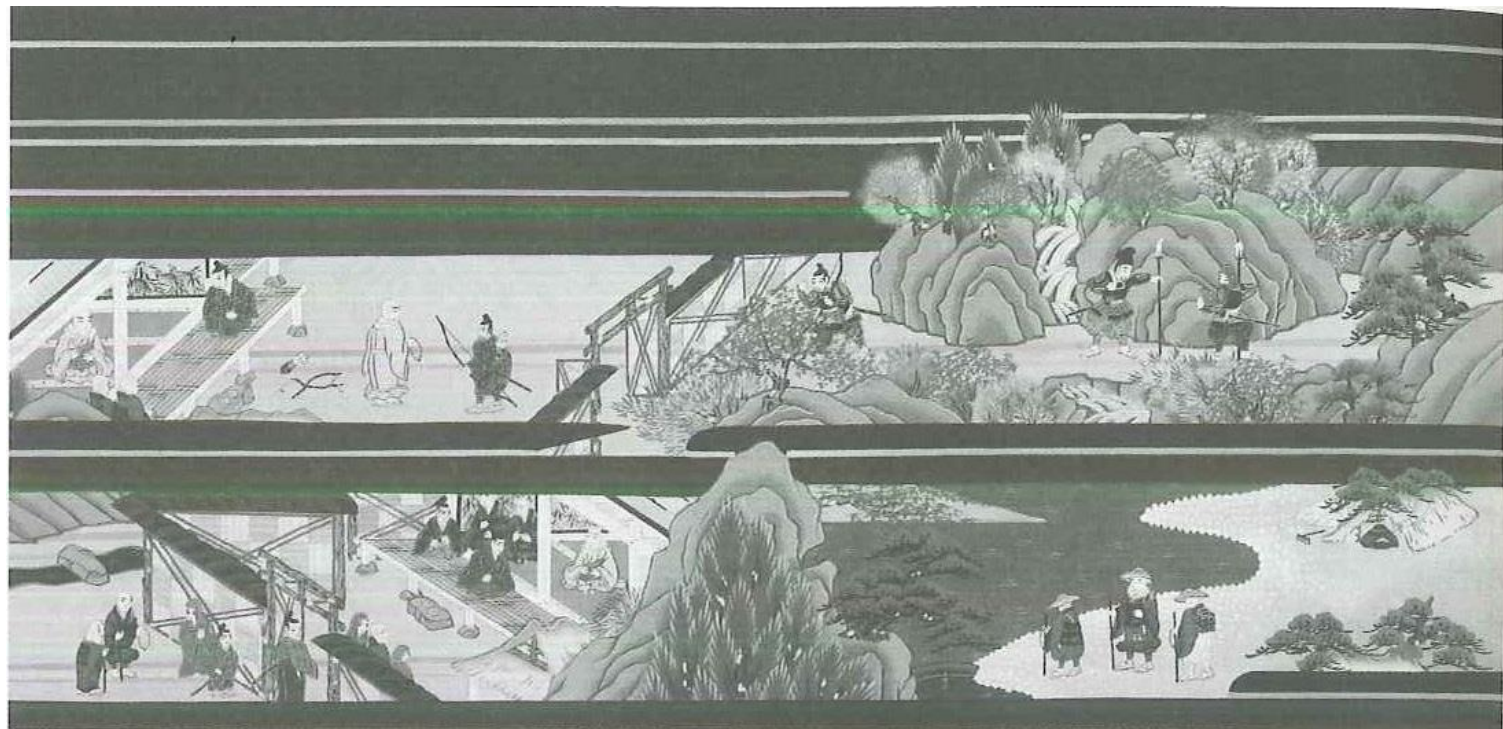
【公卿僉議（くぎようせんぎ）】（下段左）

念仏停止の申し出を受けて、御所ごしよの仁寿殿で行われた僉議せんぎの様子が描かれています。

そして一二〇七（承元元）年念仏停止が決定し、住蓮・安樂あんらくなど四人が死罪、八人の流罪が決定します。源空聖人（法然聖人）は土佐国（実際には讃岐国さぬき）、親鸞聖人は越後国国府へ還俗（僧侶の身分の剥奪）の上、流罪となりました。

【師資遷謫（ししせんちやく）】（上段）

承元元年じようげん旧暦三月、源空聖人が旅立たれるところ（上段左）と、親鸞聖人が旅立たれるところ（上段右）です。源空聖人七十五歳、聖人三十五歳、この日に最後にお二人はこの世で再会することはありませんでした。



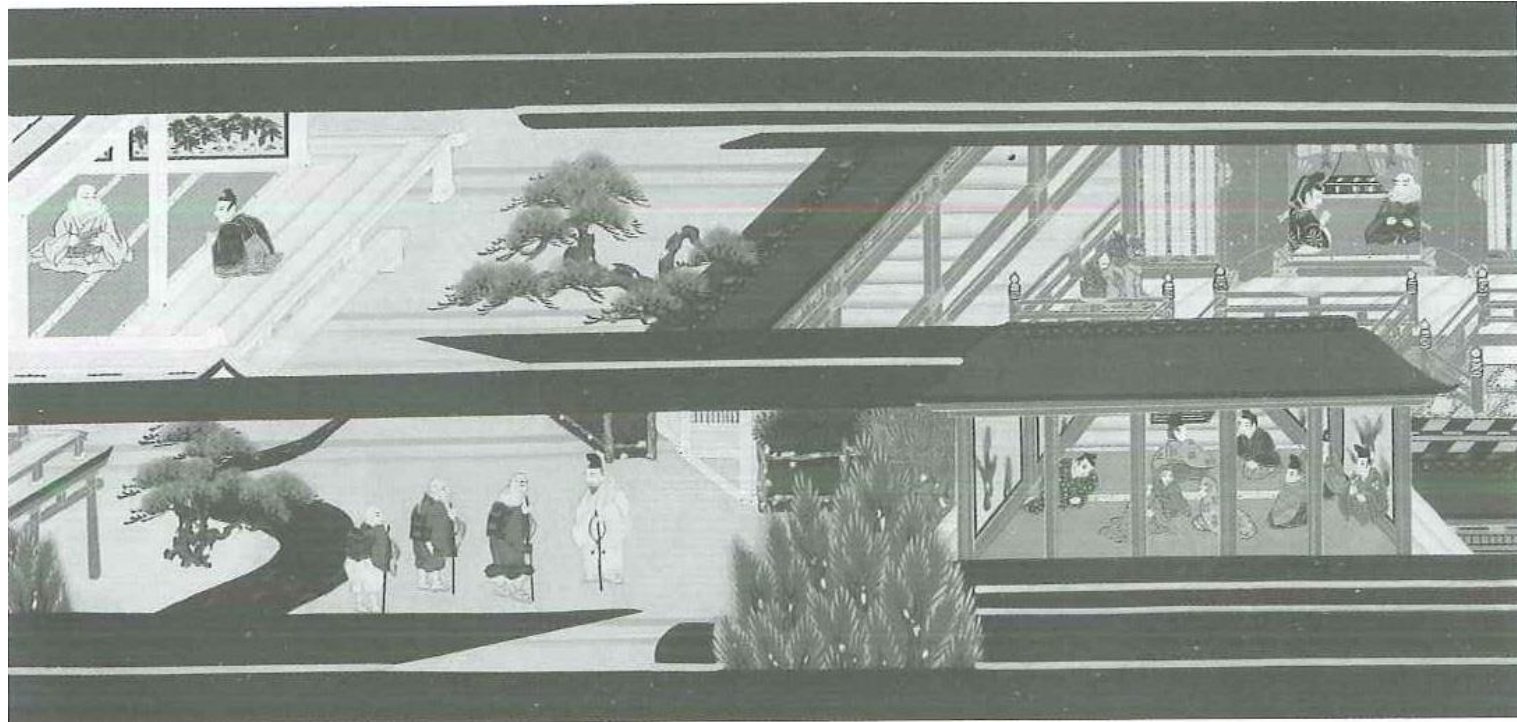
【稲田興法（いなだこうぼう）】（下段）

一二二一（建暦元）けんりやく年、親鸞聖人三十九歳の時、流罪の赦免しやめんがくだされ、源空聖人（法然聖人）は赦免の翌年、京都でご往生されます。

聖人の元にもご往生の事は伝えられたと考えられますが、京都へは戻らずに関東へ向かわれ（下段右）、やがて今の茨城県笠間市稲田に草庵そうあんを結ばれ、多くの人が参拝するようになります（下段左）。

【弁円済度（べんねんさいど）】（上段）

聖人の草庵に多くの人が参拝する様子を快く思わない山伏やまぶしたちがあらわれ（上段右）、その中の弁円べんねんという山伏が、ついに聖人の命を奪わんと草庵に押しかけます。しかし、聖人の立ち振る舞いをみて、弓矢を折り、刀を捨てて弟子になりたいと申し出て、聖人から明法房みょうぼうという名を授けられました（上段左）。



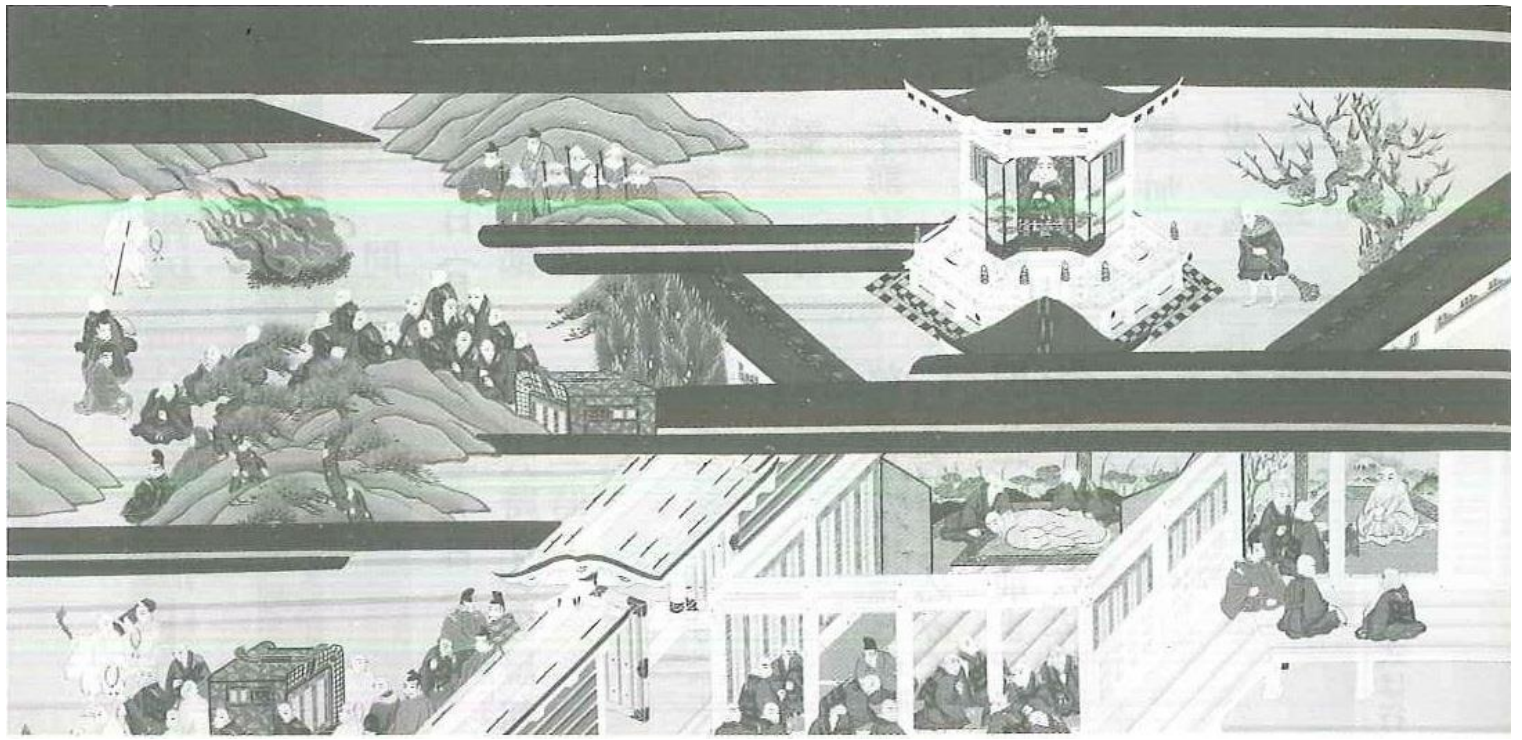
【箱根霊告（はこねれいこく）】（下段左）

親鸞聖人が関東に住まわれてからおよそ二十年、聖人は京都へ帰られます。その道中、一行が箱根を通りかかったところ、烏帽子えぼしを被り衣を整えた箱根神社の宮司ぐうじが出てきて、「箱根権現こんげん（神）が今夢に出てきて、尊敬している方が通るのもてなしてほしいと願われたので出てまいりました」と、申し出てきます。一行と宮司が話をしているその様子が描かれています。

【熊野霊告（くまのれいこく）】（下段右・上段）

茨城県水戸市飯富いいとみ おおぶ（旧大部）に、お念仏を喜ぶ平太郎へいたろうという者が住んでいました。その平太郎に大部の領主が、和歌山県の熊野神社に参拝するよう命じます。

平太郎は、念仏を申す者が、神社に参拝してもいいものかと心配になり、京都の聖人の元を訪ねます（上段左）。聖人は「阿弥陀如来の誓いに身を任せる者としてお参りすれば、神様を軽んじることはありません」と言われ、平太郎はお念仏しながら熊野神社に参拝します。その夜、眠る平太郎の夢に（下段右）、正装した熊野権現（神）と聖人が夢に出てきます（上段右）。



【洛陽遷化（らくようせんげ）】（下段・上段左）

親鸞聖人は、一二六二（弘長二）年十一月の下旬体調を崩されます。それ以来、世俗のことは何も仰らずに、ただ阿弥陀如来のご恩と、お念仏が絶えることがなかったそうです（下段右）。

そして十一月二十八日、今の暦では一二六三年一月十六日のお昼頃、お釈迦様がお亡くなりになった時と同じように、頭を北にして右脇を下に、西を向いて往生されました（下段中央）。御年九十歳でした。

お弟子たちが茶毘の炎を囲み（上段左）、聖人を偲び、悲しみ涙にくれる様子が描かれています。

【廟堂創立（びようどうそうりゆう）】（上段右）

聖人がご往生されて十年後の一二七二（文永九）年、京都東山の西側の麓、鳥部の北、大谷にあった聖人のお墓を吉水の北、今の浄土宗知恩院の北あたりに改葬して、お堂を建てて親鸞聖人のありし日のお木像がご安置されました。

このお堂が本願寺の起源で、このお木像こそ今の御影堂にご安置されている御真影さまだと伝わっています。

小樽別院の法要行事日程

除夜会	12月31日（火） 15：00
除夜の鐘	12月31日（火） 23：50
元旦会	1月 1日（水） 6：30
宗祖御祥月法要	1月16日（木） 13：30
新年交礼会	1月16日（木） 16：00
春季彼岸会	3月18日（水）～20日（金）
晨朝百日参拝	5月 1日（金）～ 8月8日（土）
宗祖降誕会	5月24日（日）
盂蘭盆会	8月15日（土）～16日（日）
初盆法要	8月16日（日） 11：00
納骨堂総追悼法要	9月19日（土） 13：30
秋季彼岸会	9月20日（日）～22日（火）
報恩講法要	10月13日（火）～16日（金）

ご家庭でも報恩講をおつとめいたしましょう。

1月9日より16日まで御本山に於いて御正忌報恩講がおつとめになりますので、別院を始め一般寺院においてはそれまでに「おとりこし報恩講」を執り行うのです。

門信徒の皆様も「おとりこし報恩講」を各家庭で別院の僧侶と一緒に「おつとめし」、宗祖親鸞聖人のお伝えくださったお念仏のみ教えを喜び、家族一緒にあじわせて頂きましょう。

ご家庭での「おとりこし報恩講」修行については、別院（☎0134-22-0744）までご相談ください。



浄土真宗本願寺派

本願寺小樽別院

〒047-0017 小樽市若松1丁目4番17号

TEL (0134) 22-0744

FAX (0134) 29-4080

テレホン法話 (0134) 27-1616

ホームページ www.otaru-betsuin.com/